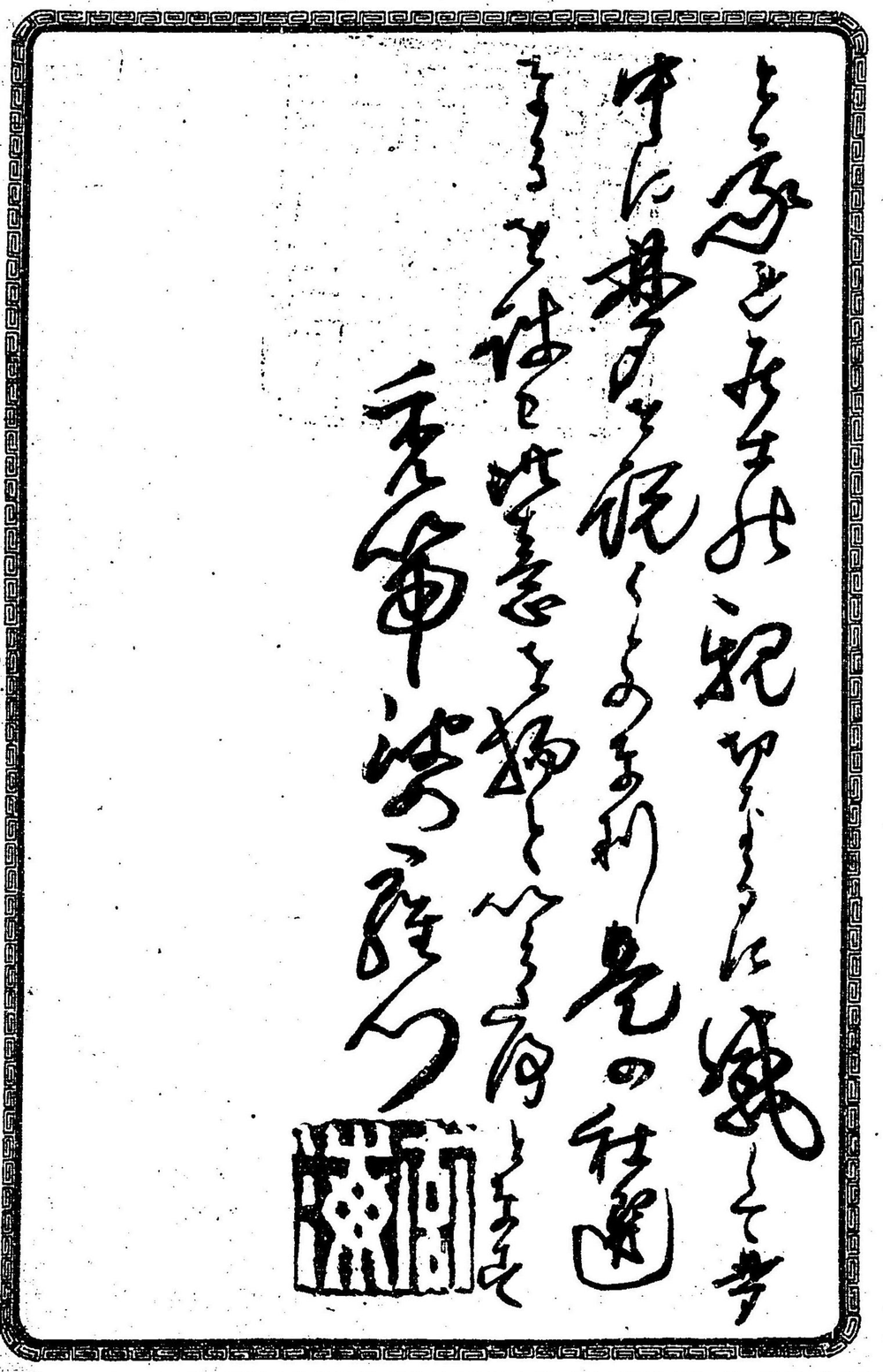
F-22

臨軒關鈞叟禪師著

161
663

諸宗必要
坐禪法草解

恒華福永進精商店
發　　兌



諸宗必要坐禪法早解

適隱軒　關　釣叟禪師著

●東福聖一國師密に九條大臣に開示する法語和解

法語とは法は心法にて心法象ち無くして十方に貫通す語とは衆生をして悟らしめん爲めに示しを垂るゝなりされば心法に說くべき旨ハ無く示すべき義は聊か有るべからず所以如何となれば人々悉く如來の智惠德相を具足せざる者はなし門より入る者は家珍にあらざとて吾が心性は吾が眼で見て成佛せざれば已れが心を他人に說すべき理由あるべからず哀い哉衆生無始とり顚倒

して煩惱に眛まされ三界に輪轉して暗きより暗きに遷り種々の苦を受く是れを悲しみ憐れみて飯を齕で幼兒に食しむるが如く醜き程に和解して示を垂るゝなり是れを泥裡に土塊を洗ふと言ざるを得ず

夫れ坐禪とは文字にて讀み下すときハ坐して禪ると言ふなれども左のみにあらず工夫相續するときは坐するも臥すも歩むも算盤をはじきて商いするも耘耕して五穀を作するも釣を垂れ網を曳くも荷ひ賣するも寐ても寤ても悉く坐禪なり動中の工夫は靜中に勝ること百千萬倍とは夫れ此を言ふなり正念相續するに於ては歌も舞も嗔るも嫉妬も邪念も戀ひも無常も皆な禪なり萬事

萬物に通達し自在無礙にして嫌ふ底の法なく接得自在なるが故に坐禪の宗門とは諸佛頂上の宗門と云ふ義なり一切諸の法は此の門より流出し智惠神通の妙用も此の中より生じ人天の性命も此の中より開きたり先づ釋迦如來四十九年華嚴阿含方等般若法華涅槃五千四十八卷の經典も諸史百家の書物も八萬の細行も仁義三千威儀八百も萬稽の妙術も皆な此の中より通達し又天上人間或は禽獸魚虫の性命も皆な此の中より開きたるなり故に十方諸の佛も此の中に安住し菩薩も此の道を行して佛の位に至り羅漢ハ勿論外道と雖も此道を修行すれども正道にかなわざれば悟り得ると能わず凡そ顯密の

宗旨念佛修驗の宗旨と雖も此の道を悟らざれば佛の位に登り得るよと難たかるべし故よ古人十方の智者此の宗に入ると宣へり

○問て曰く此の禪を諸の法の根本と言ふハ如何

○答て曰く禪とハ佛心なり律とは外相なり教とは說ける言葉なり稱名ハ方便なり此れ等の微妙皆な佛心より出でたり深く思ふべし三身又は四智圓明も妙覺果滿の如來も無上正等正覺を得るも見性の眼より見るときは皆な影坊子にして全く實体有ることなし是れ古人の斷言ならぢやや

○問て曰く悟りの法は象ちも影も無き者なれば如何して

てか靈德顯われ見性何を以てか證據となすや

○答て曰く已が心は是れ佛なり天地の大祖萬物の根元たる心性此の外か何を以てか靈德とすべきや外物何の證據をすべき物ありや外物皆な生滅の物にて萬代に通徹して滅せざる物ありや心性のみ無始無終にて不生不滅なり是を以て證據とせざれば外に證據をすべき者有るべからぢ

○問て曰く此の一心を修行すれば一心是れ唯だ一つの法ならぢや萬善萬行を修せば功德なんとしてか一心なる唯だ一つ乃法にをとるべきやや

○答て曰く古人曰く頓に如來禪を悟れば六度萬行体中

に圓なりと說けり然れば禪なる一つの法を修すれば一切の法は皆な備りたるなり縱令萬善萬行を修するとも悟らざれば妄想煩惱なり妄想煩惱何の功德かあらんや若し悟らざれば何をか成佛とせんや

○問て曰く佛心宗を如何か修行すべきや縱令修行するとも必定悟ると言ふ定まり無かるべし若し定り無きことなれば修行して何の益ろ有るべきや

○答て曰く此の宗門は不思議解脫の道なるが故に若し一度耳に觸るゝ者ハ勝れたる菩提の因緣となる若し此の宗門を修せば佛の心の至極とす故に佛の心元より迷ひもなく悟りもなく正さしく是れ釋迦如來雪山

に於て六年間雪に埋れ日にあぶられて辛苦修行し玉ふは取りも直さず吾が宗門の修行なり縱令人々未だ悟り得ざれども一時間坐禪すれば一時間の佛けなり一日修行すれば一日の佛けなり一生坐禪すれば一生の佛けなり若し遠方のまゝと言ふも尤もなれども已れが心の如來を尋ね求むるを得がたしと言ふは修せざるの甚しきなり吾が宗は十萬億土の遠きを求むるにあらざると死して後ちのことを求むるにあらず卽今此の坐を退かざる已れが心源を見るなれば此れ程近きことなし他人を目的とするにあらざる他の教へを賴むにあらざる已れの眼にて

已れの心源を見る是れ程慥かなる安心あるべからざ
唯だ頭の燃るをもみ消すが如くに精進修行すると大
機根太法器の人とは言なり
○問て曰く若し此乃道を修行するよは如何が用心すべ
きや
○答て曰く佛は心は象ち無ふして萬事萬物に執着なし
金剛經に一切は象ちを離れたるを諸の佛とすと故よ
瘡めても寢ねても行いても坐しても無心無念なる處
が用心なり工夫なり
○問て曰く斯の如くの修行は信じ難く成し難し但だ經
を誦し多羅尼を返り又は戒を持ち或は念佛稱名して

其の功德を頼んと思ふ是れ如何
○答て曰く悟り得たる者の誦する經多羅尼と悟り得ざ
る者の讀む經多羅尼とは其功德天地の相違あり如何
となれば悟りたる者の誦するは心境一如物我不二な
れば諸佛諸菩薩に通徹し諸天善神人界三惡四種蠢動
含靈に餘さず通徹すれば其功德廣大無量無邊なり悟
り得ざる者は此の境界全く無ければ我身一分のみと
なり此に於て其功德天地を懸隔するみとを知るべし
戒を持つも又然り悟り得たる者は無相心地戒體なり
悟り得ざる者爭でか斯乃如きの妙用に至り得るみと
あらんや然れば何れを以て佛地とするや念佛稱名と

でも口に誦するを念とは言はず心に念ぜればなり心に佛を念ぜれば是れ坐禪なり最も經多羅尼は文字にあらず一切衆生の本心なり衆生皆な本心の佛を失て迷へる故に樣々の譬へをとり教へて本心の佛を悟らしめ迷ひの苦患を止めんが爲めなり本心の佛を悟り根源に歸する人は其眞實の經を誦する人なりと言ふべし若し文字を口のみ唱へて至極となるなれば寒氣の強きとき口に火と言ふて暖かになるか熱するとき風と言ふて冷かなる可や又飢へたるとき食物の名を言ふて服滿するか欲しき物の沙汰をして得心すべきや終日火々と言ふて熱すべからず通夜水々と呼んで口に濕ふべからず煩惱に染み込んで法の智惠の乏しきとき唯文字のみの上に走つて口のみに如來の大智惠と言ふて般若の大智惠を悟るべからず是れ皆な繪がける餅の如し哀い哉妄念妄執深くして諸の法に於て有所德の思ひをなすとて法は修すれども法の爲めに欲心を生ず大愚痴なり此の有所德の心なきを大乘の般若と名く是れ諸佛の無相清淨の智惠なり此の智惠は煩惱生死の根源きり盡す故に般若の利劍とは言ふなり

○問て曰く善根の功德を積まずして爭てか萬德圓滿の佛となるべきや

○答て曰く善根功徳を積むを嫌ふにはあらざ善根功徳を積んで佛を願ふ人は三大阿僧祇劫の長き限りなき年代を經て成佛すべし但直指人心見性成佛を修する人は卽今驀く直きに成佛すべし初めて成佛するにはあらざ自己本來なればなり

○問て曰く禪を修する人は善根功徳を賴ざるや

○答て曰く衆生を利益するが爲めに善根を修すれども善根の力を賴むにはあらざ常に無心なるのみなり見るべし釋尊三十二相八十種好を備るも衆生を度すのみの方便にして外に何の望みかあらんや唯だ無心なるのみ

○問て曰く無心を至極とするなれば誰れをか見性悟道の證據とすべきや

○答て曰く一切の惡智惠惡見識を截り拂ひ思量分別を止むるを無心の至極とは言うなり修行の見識起さざ見處滯らざれば成佛をも望まざ迷ひの見なければ悟りをも求めざ尊ばるゝをも敬わらるゝをも名聞をも喜ばざれば恨むることもなし憎い可愛の念なければ吾れをも他人をも或は親み又は踈ざる差別もなし一切の善惡都て思量することなき是れを無心の道人と名るなり此の道は凡夫や二乘の知るべき所にあらざ○問て曰く諸の經文の中には多く萬善萬行功徳を說

く何ぞしてか無心の功徳を直接に説かざるや

○答て曰く本覺の菩薩は已に了解する故此れを説くに及ぶ智覺なき者は謬て解することと多き故に法華經に智惠無き者には此乃經を説くべからざるは此の意ろなり經文には八萬四千の法門として凡夫の八萬四千の煩惱を消滅せしむるの法門なり其源を尋るに色と空とこの二つの法を出ることなし色とは四大五蘊として此の身体なり空とは悟菩提なり迷ふときは煩惱となる此の心なり身体は形ち有る故に色と言れ心は象ちなき故に空と言ふなり一切の境界は此の身と心との外には説くべきことなし

○問て曰く四大の形体と言へる此の身体は元より迷ふか悟るか如何なる者ぞ

○答て曰く色身と云ふ此のからだは迷ふの悟るのと言ふ差別は更になし一切假りに顯れたる物にて唯だ夢め幻し泡影の如く萬事都て彼れ是れ思案分別する者もあらざ

○問て曰く二乘の修行者も此の無心あり菩提あり涅槃の悟りあり大乘とは如何程の差別ありや

○答て曰く二乘は已れ一分の修行にて衆生を濟度することを知らざ聲聞とは如來の教を聞て修行する人縁覺とは因縁を觀して修行する人なり初めより身を心

と を煩悩と思ふて此れを厭ひ身と心との執着を滅し
盡して枯れ木の如く石瓦の如くになり色界を越へ無
色界天に入るなれども全く正法にはあらざ小乗の果
として我れ獨り佛を望む拙なき行にて大乗なる人天を
化度する無心の人にはあらざ

○問て曰く大乗の菩薩は此の無心の道ありや否なや

○答へ曰く大乗乃菩薩は十地に至るまで惑へる智恵の
障りありて未だ無心の地に至らざ惑へる障りとは何
ぞや法を求むる望み有りて本分の無心にかなわざ十
地を越へ等覺として如來の始覺に至て初めて無心の地
に至るなり

○問て曰く此の菩薩にだもかない難きほどの無心なる
を爭か初心の人たやすく此の道にあのうや

○答て曰く夫れ眞正の法は不可思議なり三賢十聖とて
羅漢の位を三段と十段との爲めに一段づゝ經へ經て進み登なり利根の人は初めに
無心の道を悟るなり

○問て曰く見性悟道の人とて悟り得たる人は直きに佛
に成ると雖も何んとして神通光明はなきや又常の
人と替りて不思議の働きも見へざ是れ如何

○答て曰く神通光明は有れども凡夫は見ること能はざ
不思議の働きあれども猶ほ窺ひ得ることあし譬へば

賢者の智略を目前に見作ら窺ひ知ること能わざるが如し悟たる人と雖も此の身は過去の妄想より生れ來ること故悟りたりと雖も奇怪なる神通光明は露れざれども六根六塵に通達し天の天外地の地外を眼に見破るは神通光明にあらざして何ぞや難行苦行をもからざ三大阿僧祇劫の限りなき長き年代をも經ざして生死の迷ひの根源を截り盡して卽坐に成佛す是れを見性の妙用と云ふ外に何の妙用か之れあらん是れより大智惠の光明を以て一切衆生の無明の暗を照して濟度す此の外の光明何の益らからんや大智惠通達の外に神通を願ふは天魔外道なり心の外に道を求むるが故に外道と言ふ狐ね狸も神通變化あり是れ等を貴ぶべきや深く思ふべし根機の下劣なる人は或は迂遠なることを信用し或は奇怪なることを信じ易し如何となれば十萬億土と云ふ三大阿僧祇劫とか死して後ちとかいかにも遠きとにはらざや吾が道はしからざ驀く直きに吾が眼を以て吾が心性を見て安心す此の眼は無始劫を見透し盡未來際を見ぬいて大安樂の境界に至る此の時諸佛の世界を見透し三惡四種は微塵にくだき盡して法界を見ること吾が掌を見るよりも確乎たり其見ること眼より近きことなし萬物の內に已れが心性より近き者なし其證據とする處已れが心

に承知するより確然たることとなし若し教へを受け文字を讀みて更に疑むを容るゝことと莫れと時々に懇諭すと雖も眞理を悟らざる哀さには法門曠莫なるが故に已れが了簡に相違すれば何程疑ふべからざるとは思ども是非とも疑惑を挿む者なり半信半疑にして命終に臨んで苦痛の爲めに心顛倒し錯亂して六種に沈淪するなり若し見性の眼あらば此の時に當て苦痛に迫ると雖も泰然として本地に歸るなり必ず忽に心得べからざ

○問て曰く見性成佛の意ろを如何なる智惠を用ひて是れを悟るべきや

○答て曰く經論を學び得たる智惠を見聞覺知と名く是れは愚痴なる凡夫に對する智惠なり眞正の智惠にあらざ回光返照として坐禪にて磨きたる智惠を惠眼と名く此の眼を以て見性成佛するなり兎角經論を見る人謬て因中に果を說くことあるべし因中に果を說くとは如何なることぞ譬へば大根の種を以て大根じやと言ふ無生も得ざる人にして正覺の果目を見て吾れは已に佛位に至り得ると思ふ是れ佛理を悟り得ざる哀しさなり譬へば都に至り得ざる人繪圖面を見て都の實境を踏たる如く思ふなり佛理を悟らざして果目を見て佛智に至れりと承知するは大に誤りなりと言ん

や眞正に佛理を悟り得て吾が物に成りたるを見性成佛とハ言ふなり

○問て曰く本具の佛性又は回光返照とは如何なる者なるや

○答て曰く一切衆生皆な佛性有りと釋尊說き玉へば衆生の心本と不生不滅とて大涅槃の悟りを備へて居るが故に一切の佛も一切の衆生も此の性を本地法身と云い此の光明は滿世界を照らして餘す處なし此光明一切衆生の無明の暗みを照す是れを回光返照と云ふ此の回光の至らざる所を無明と云い又惡魔外道の世界と名く此の世界に煩惱の鬼の神住居して佛にならんとする心を食わんとす此れに害せらるゝ人は妄念を本心となし欲心を養ひ立て貪欲の業盛なるを歎樂となし三惡四生に輪回して止むときなし三惡とは地獄餓鬼畜生なり四生とは卵生とて卵にて產るゝ者と胎生とて胎內にて姿形ち成て產るゝ者と濕生とて水の中に產れ或はしめりの有る所にわきいづる者と化生とて產れて後ち姿の替る者或は胎內より出でゝして姿た形ちの出ける者天人は是れなり何れのときか生死の妄念を斷じつくさんや

○問て曰く生死は妄念より起るとせば妄念の起る源を悟らば生死の止むべきや

○答て曰く衆生は晝夜止むときなく妄念に顚倒せられて本分の佛性自ら煩惱に埋まれて黑暗なり譬へば明月を黑雲のおくすが如し此の源を悟らば明月の雲を出るが如し鏡清よければ萬の影明かに照すが如しさすれば一切諸の法に通達し萬境として天地萬物に對しても毛頭ほども汚るゝことなし是れ本分の佛性神通自在なるが故なり

○問て曰く坐禪の用心に一切善惡都莫思量と云ふ語は何の謂ぞや

○答て曰く善も惡も都て思ひ量ることなれとは直きに生死の根源を截り盡す所なり坐禪のときばかりとは思ふべからざる若し此の句を會得する人は無始より盡未來際に至るまで始めなく終りなき常住不變の道を得るなり

○問て曰く大々の念小々の念とは如何なることぞ

○答て曰く小々の念とは一切の緣より起る念にして譬へば金銀に緣すれば欲しいと思敵きに對すればにくしと思い吾が意にかのう物に緣すれば可愛と思ふて一念一念に變り行くを言ふなり大々の念とは無始劫より未來際に至るまでの貪嗔癡の三毒に迷い此に死し彼に生るゝを一念と見做すを大々の念と言ふ此の大小三毒の念を坐禪のときばかり止むる人とても眞

寶の道心なき人は生死の根源を截ることならざ識情を盡すことなきが故に矢張以前の赤凡夫なり若し此根源を截り盡さば今まで惡みたる煩惱妄想は却て智惠の光明となつて化度自由を得るなりさらば煩惱は菩提となり三毒は三聚淨戒となり生死は涅槃となり六塵となる目に色形を見て迷ひ耳に聲を聞いて迷ひ鼻に香を臭いで迷ひ口に味ひを甘じて迷ひ肌に觸るゝ者に迷ひ意妄想を慮て迷ひたる六塵も六神通となるなり

○問て曰く久しく坐禪修行する人は身心明かに清淨なるべけれども初て修行する人は妄想顚倒如何か止むべきや

○答て曰く妄想顚倒をば惡むべからざ唯心性を明むべし一心に迷へる故に本來清淨の所に於て強いて妄想顚倒ありと思ふなり譬へば眼の中に種々のことを夢に見れども夢醒めて後ちは萬事皆な妄想となる斯の如く一心を悟れば萬事皆な空にして一物なし

○問て曰く煩惱卽菩提生死卽涅槃と云ふ心如何

○答て曰く煩惱とは愚痴無明なり菩提とは一切衆生の心の佛けなりされども已れが佛性を知らざして外に佛性を尋ね求む心の外に善惡を見て一切の色ろ形ち有る物に執着す是れを大愚痴とは言ふなり又色ろ

形ち有る物を捨ては又執着も是れ等の執着を捨てゝ
佛性を尋る人も動もすれば悟りの慢見を起し少しば
かり人に勝れたる處あれば慢心を起して魔道に落ち
入ること多し是も亦た無明なり一心は本より無心な
ることを知ざして心を起し心を求め尋るゆへ本の凡
夫の如く顛倒をなす又是れ生死の因縁なり一心は本
より生ぜることをもなく滅することも無く此の涅槃
を悟るときは我れと萬物を隔てなく差別もなく平等
不二の境界なれば善し惡しもなく憎むともなく愛す
ることも無く全く無念無念なり無心なり是れを生死卽涅
槃を言い一心の根源を悟らざして常に己れが心を失

ひ佛性を昧まも此の煩惱の源を尋るに夢め幻の如し
一心は本清淨の處に至りぬれば煩惱卽菩提なり一心
の源に至るとき本分の大智慧の光明露るゝなり此の
とき一切の法をさまり諸の佛の畢竟空を悟り得るな
り譬へば日月の光りの至らぬ岩窟は闇らけれども灯
を以て照すときは年月久く暗らかりし處も自ら明ら
かになるなり又暗みの夜も月の光りに逢ふときは空
らの有様替らざして自ら明かなり心の法も亦斯の如
し無明煩惱の闇みに迷へる衆生も心性の光りに逢ふ
ときは身も心も替らざ自ら清淨にして明かなり是れ
を煩惱卽菩提生死卽涅槃とも云ふなり

○問て曰く常住不變なる諸佛を衆生と一味平等と云ふ
ても未だ悟らぬ衆生は苦を免がるゝことなし此の故
に修行して道を悟るとは已に承知なれども見性の後
ちも猶用心すべきや
○答て曰く一味平等とは智惠の照す處にて吾れと萬物
と一如にして悟らざれば茲に至り得ることかたし經
文は教へは月をさす指の如し月を見たなれば指びに
用はなし未だ月を見ざるときハ指をみるなり悟も亦
た斯れ如く佛心を悟らざるときは經を力に教へに倚
るべし悟り得たる後ちは經教に用はあるべからず故
に言にあらずや言句は門を扣く瓦なり未だ門に入ら

ざるときは猶瓦を携て放たざれ已に門に入ぬれば瓦を
携て何の用をかなさん故に佛祖の本心を悟らざる以
前は見性成佛の言句も提して見るべけれども已に太
解脫の門を開き佛祖の本意を悟たる後ちは見性成佛
の句も奇特はなし成佛をも不可得とて佛けらしきこ
ともなければ悟りらしきこともなし
○問て曰く若し見性成佛の宗を明めざして臨終のとき
如何か要心すべきや
○答て曰く今死るとき少しても心を起さば生死の迷
ひにてよろしくなし無心なれば生まるゝ身もなく無
念なれば滅する心ろもなし無念無心のとき生るゝこ

ともなく死することもなし此身体は唯草の葉ゐむすぶ露の如し露は本より主なし吾が身ありと思ふ心をやめて無念無心本より何もない處に打ち向い生るゝとも思わざ死るとも思わざ無心無念なれば三世諸佛の大涅槃にひとし髪の毛ほどそ心を起こさば是れ輪回の種ねなるべし命終のとき縦令如何樣のことが目にあらわるゝとも目にとゞくるべからざ唯々無心を修行して片時も忘れざれば臨終の用心は別にあるべからざ眞とに無心の道ちに止めきつて外ゞと更らに無ければ風にしたがつて花の飛ぶ如く葉の風に散る如く霜の朝日に解くるが如し斯の如きの事に何の

用心すべきことが是れあらんや眞とに無心を得るときは欲界色界無色界の三界も天上人間修羅畜生餓鬼地獄の六道も佛の住み玉う淨土も煩惱の盛なる穢土も更らにあとかたもなし佛けも衆生も一物もなし此の無心の道ちに安すく住み玉ふて生もなく死も無き心を佛け最後に宣べ玉わく諸行無常是生滅法生滅々已寂滅爲樂と說き玉へり諸行無常とは世界中のいきとしいきる者のなす行ひは定めなき者にて今生れて今死する者も有れば皆な是れ夢め幻しの如く鏡に寫る形ちの如く水に寫る月の如し是生滅法とはいきとし活るもの生るれば必ず死するに定まりたる者其外木か

や草木天も地も竟には滅することは必定なり世界中のことは皆な生滅の法なり是れ唯心に思ふ一念の生れたり死したりして姿た形ちの變る處なり生れたり死したりして眞實のことは更にあるべからず生滅々已とは一切衆生の心ろの本の持ちまゐは姿た形ち無くして清淨なる者故此の心の本に至るときは無始無終の生れたり死したりと言ふ樣な面倒は一時に無くなりはて、心ろ洞らかに大空らと齊しく言語同斷な り寂滅爲樂とは佛けも無心なり衆生も無心なり天も地も萬物も形ち有る物も形ち無き物も皆な無心なり地獄も天道も無心なれば常々の心得に目には惡き事

を見ても心には惡事をみず耳も鼻も口も身も皆な斯の如したゞ無心なるは是れ三世一切の佛けの本師なり是れ第一の佛けなり此の無心の本佛を成するを諸佛の成等正覺とは云ふなり此の無心の旨を悟るを寂滅爲樂と云ふなり斯の如く法を信じて此の身を捨つるに一念も法を思ふべからざると國師說き玉へり

此の涅槃の四句の偈の講釋は未達未悟の者臨終の心得を問ふによりて其の間に應じて答へる所なり眞實大道を悟らんと發起する人は此の偈を極則とすべからざる之れを涅槃道理の禪と云ふ

古人の法語

參禪若日を期て功を成んと要せば。千尺の井の底に墮たるが如し。朝より暮にいたり。暮より朝に至るまで。千万の思案分別ひとへに只是この井を出んことを求むるの心のみにして。更に二念なし。誠によく。かくの如くに。工夫をなさば。或は三日。或は五日。或は七日。若微せざんば。老僧今日。大妄語を犯して。永く抜舌地獄に墮ん

古人此道を參學する用心の處に於て。工夫をなすと云。此説もつとも切當なりしかるに學人みな此の説に於て聞こと見ことをなき者に似たり。其のゆゑは。一个の禪の字を

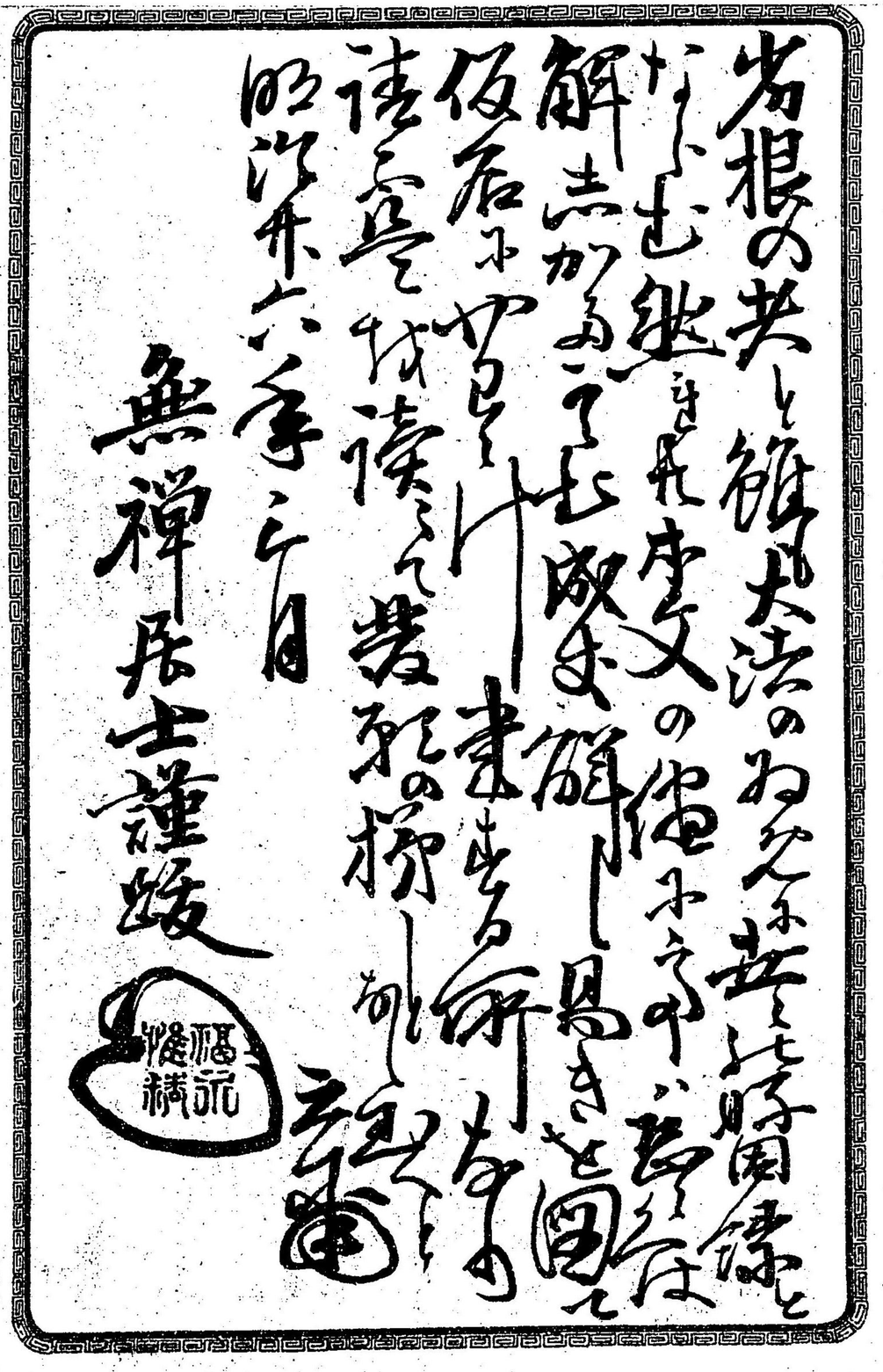
説くを聞て。或は悟やせしと思て。日夜に語言文字の中に向てたづぬるものあり。或は悟がたしと云て。頭をふつて。かへりみざる者あり。此二の物はみな工夫をなすと云理のあることを知ざ。空く一生をすごし。甘なつて輪廻をうく。深く工夫をなす理をたづぬれば。只一个の信の字を出でざ。生死事大無常迅速の八字をふかく信じて十二時中方便あるも方便なくもあれ。念々に心を放たざ。孜々兀々たるべし只この心を放たざ。孜々兀々として。つとむる處即ちこれ工夫をなすなり。初より目をとぢ。様をなし喧しきをさけ寂なるを求る等のことこれなし。只此道ハ他人より得ぬ

ものぞと深く信じ知らばたとへ釋迦達磨目の前に現れて禪道佛法を以て我心の中にむけ入るゝと云とも本色の道人ならば吐かへすべし只この心を放たざる處を守て孜々兀々として正悟を求めばその未だ悟ざる時みだりに私の見解を生ぜじそのの工夫をなす志かくの如くならば何ぞ如來禪祖師禪の吾が掌の内に入ざることをうれへんや

佛祖を學んと思はゞまづ決定して生死の大事を明めんと思ふ正念を立べし此の志つねに眉目の間にあれば萬緣万境紛來ると云へども別に一毛頭の他念を起し分別を生じてその志をさゆるとなし若生死のためにする正

念眞切ならざれば決定して日用の中工夫をなすとあたはざ若強てなすとも只暫時のみならん久遠なることあらじたとい聰明利根にして文字の上よ於て了解することを有とも只見聞の智惠をますべし實に生死大事の上にて於ては何の用にも立べからざ是只根本の志眞實ならざるのを是故に學道に肝要三あり第一に生死大事のためにする心切なるべし第二に世間虚妄得失等の相を識破をべし第三に一片長遠決定の心を起し永く退轉せざるべし此三若其一をかく時は廢る其二をかく時ハ失る三の者ともにかくときはたとへ一代藏經に通じ百家の書を讀とも只業識のたゝけ高慢を長じて少も吾身のをぎ

ないにゐるべからざ



明治二十六年三月廿五日印刷
明治二十六年三月廿八日出版

正價金貳拾錢

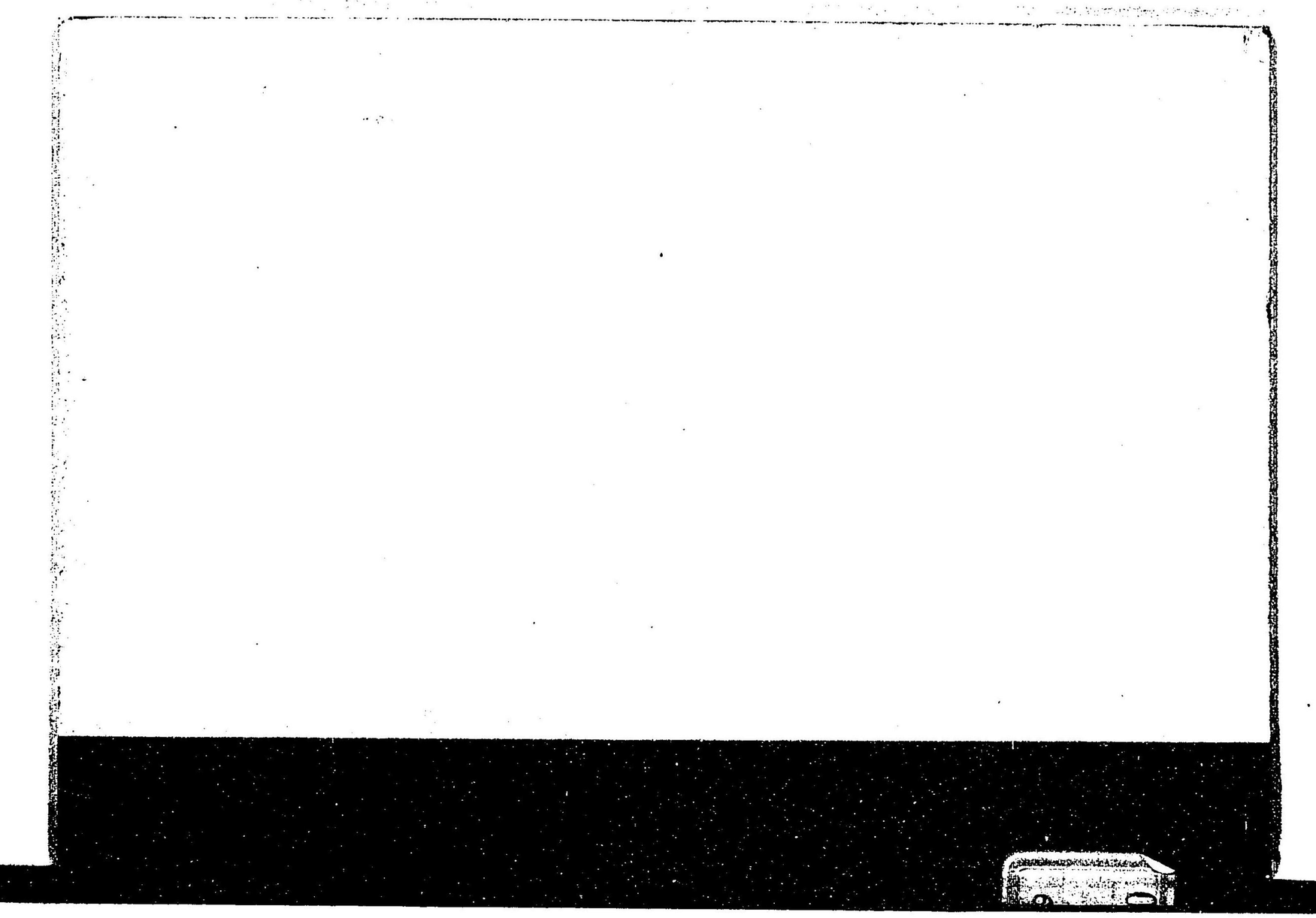
版權所有

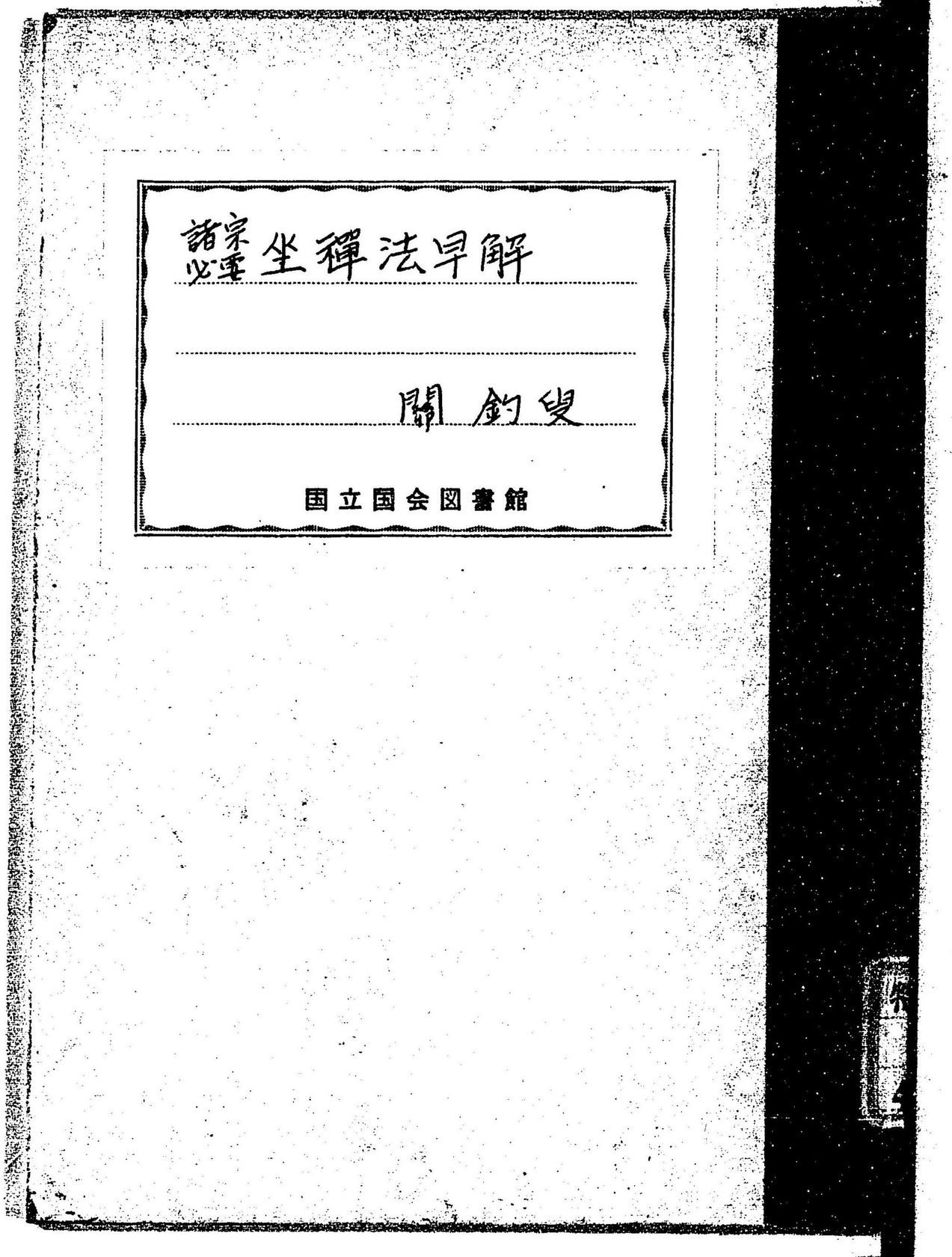
著者　長崎縣北松浦郡平戸村　木禪庵寓　關釣叟

發行兼印刷者　大阪市東區北濱二丁目九十九番屋敷　福永惟精

印刷所　大阪市東區北濱二丁目三十四番屋敷　龍雲舍

F-22



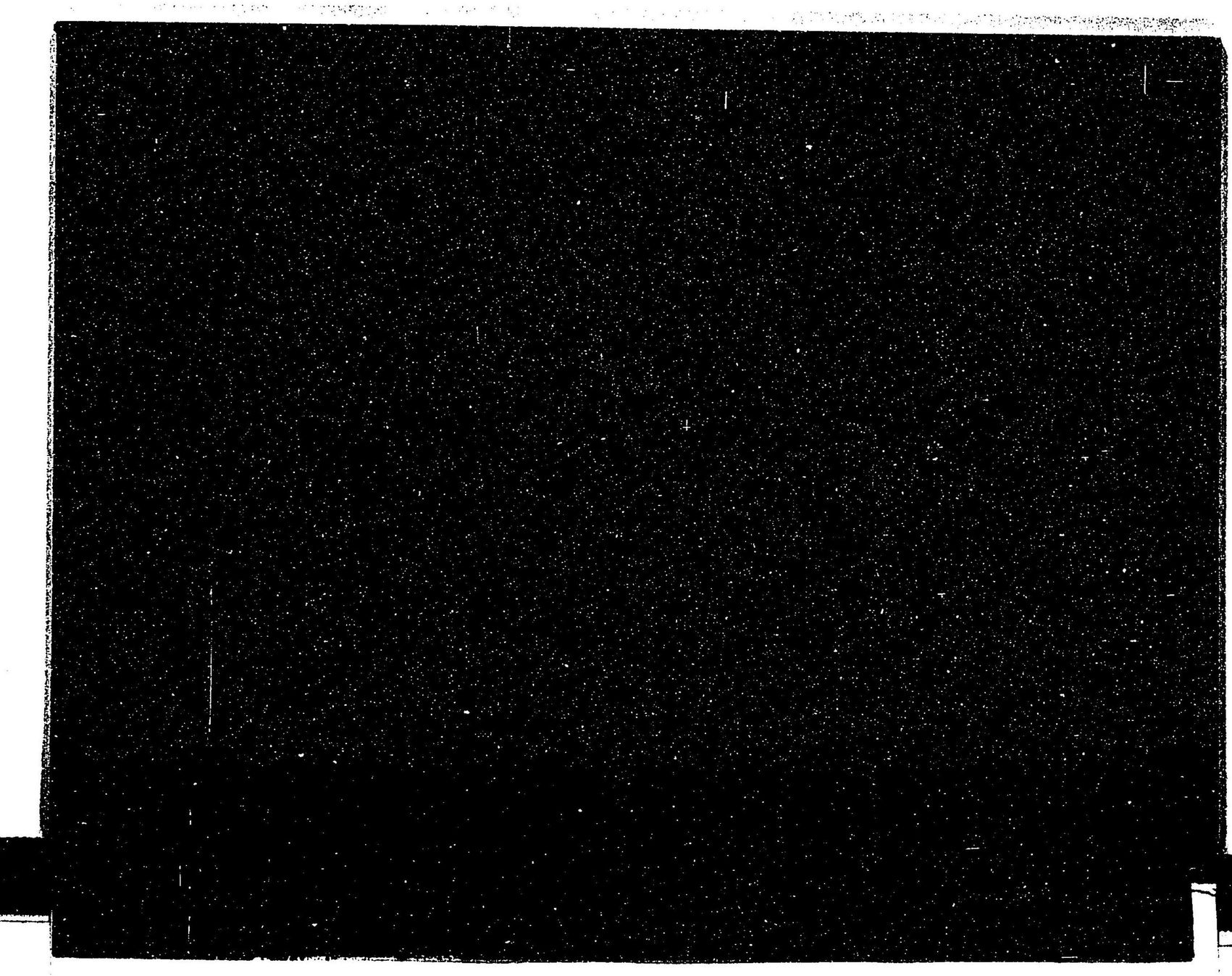


019446-000-2

特49-450

坐禅法早解

関釣叟／著

M26. 3

ABG-0159